

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05197

研究課題名(和文) アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study of the Diversities of College Entrance Examinations and the Standardization of College-bound Programs in Asia

研究代表者

小川 佳万 (OGAWA, YOSHIKAZU)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：90284223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：近年アジア各国では大学入試改革が大胆に進行しているが、その主たる目的が格差是正のためであることで共通している。そのための特別措置は少数民族を対象としたものと、農村を対象としたものの二種類あり、具体的な措置としては、加点措置と定員枠の設定である。ただし、これらはすべて安定した措置とはなっておらず、常に論争を巻き起こしている。また、現在さまざまな高大接続プログラムが各国で導入されているが、それらは進学する大学が国内か海外という軸と、履修後の単位認定が特定の大学においてのみなのか、多くの大学で認定されるのかという軸で四事象を設定すれば適切に分類できる。

研究成果の概要(英文)：This study found that many Asian countries and areas shared one of the main purposes of recent years' college entrance examination reform as for reducing many gaps in the societies. There are two kinds of the preferential policies, and one is for ethnic minorities and the other for students in rural areas. Both of them include the steps of adding points of the exams or of quota systems for specific groups. They are, however, controversial issues in many countries and have not been settled yet so far. It also found that there were many kinds of college-bound programs including IB and AP programs there, and they could mainly be categorized as four types, based on an axis suggesting the domestic or overseas bound program, and the other one suggesting that one college authorizes academic credits or many do them.

研究分野：比較国際教育学

キーワード：高大接続 大学入試 アジア グローバル人材

1. 研究開始当初の背景

近年のアジア諸国における高大接続問題は、主として2つの背景がある。一つは中等教育の多様化と高等教育の拡大である。その必然的な結果として高校生・大学生の学力低下問題が各国で顕著になってきているが、そのための重要な施策の一つが大学入学者選抜方法の抜本的な改革である。そこでは公正さを担保したうえでより多面的な評価方法を導入するという動向がみられ、特に東アジアで顕著なペーパーテスト重視からの転換がある。

もう一つはグローバル化の進展である。その結果、国際的な競争に打ち勝てるグローバル人材の育成にも各国は取り組んでおり、また PISA 型学力観は各国の初等・中等教育の課程に大きな変更を迫っている。特にグローバル競争を意識してか、そこでは多くの場合、学力優秀者に対して大学レベルの科目を提供しているが、海外の大学への進学を促す国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) のような国際教育プログラムが各国で導入されてきていることも注目される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アジア諸国における大学入試関連の改革を入試制度改革と高大接続プログラムという2つの視点から捉え、国際的比較検討を行うことにより、大学入試改革の各国の独自性とアジア的特質を明らかにすることである。

各国の昨今の教育改革では、疑いなく入試改革がキーワードの一つになっていて、日本を含めて大きな社会的関心と論争を巻き起こしていることは多くの論者が指摘している。さまざまな反対や抵抗に遭いながらも各国・地域が大胆な改革に取り組んでいるのは、PISA 型と呼ばれる 21 世紀型学力に対応した入学者選抜を実施したいという意図、さらにはグローバル社会で活躍できる人材の育成を最重要課題の一つと考えているからである。そしてその改革は高校教育段階にも及んできていて、各国でさまざまな高大接続プログラムが登場してきている。

それらの内実、具体的な施策や動向が各国の社会的状況や文化的背景を反映して多様であることは国際比較研究の視点からたいへん興味深いことであるが、その多様性の検討とともに、全体を貫く共通性にも注目していくことにする。

3. 研究の方法

第一の大学入試研究に関しては、各国・地域の試験の内容と選抜方法について、試験科目や選抜方法、具体的な手続きなどを分析する。特に、1) 試験科目の多様化 (従来の科目筆記試験以外の面接試験や小論文の導入などの試験科目の新たな試み) 及び、2) 選抜方法の多様化 (AO 入試や推薦入試などの選抜方法の新たな試み) に注目する。

第二の高大接続プログラム研究に関しては、各国・地域の当該プログラムの内容と運営方法について、科目やレベル、対象、手続き、評価などを分析する。特に、1) 国際教育プログラムの普及状況、及び、2) 国内教育プログラムの特徴、に注目する。

研究の対象国は、日本を含めたアジア諸国・地域 (韓国、中国、香港、台湾、タイ、インドネシア、シンガポール、インド) とイギリスである。イギリスを加えたのは、旧英連邦下の入試制度、さらには教育制度全体が今なおイギリスの影響を受けていることが明らかとなり、その意味で旧宗主国イギリスの最新動向をおさえておくことがアジア理解の助けになると判断したからである。

4. 研究成果

(1) 大学入試改革の方向性

過去の努力と将来への期待

アジアの大学入試の大原則は、筆記試験である統一試験の点数の多寡で合否を判定することである。それは、試験日当日の学力を測っていることになり、これまでの努力を評価しようとするものである。試験には運不運がつきものなので、これまでの成果が十分発揮できなかったということは多々見られるにしても、こうした複数の科目の筆記試験の点数を合計することによってその総得点はその時点での学力であったと多くの人に納得される。一般にこうした筆記試験は知識の量を中心として過去の努力を測っていると思ふことができ、それ以外を考慮することは不公平ということになる。香港のケースはこの典型例といえるであろう。筆記試験の結果のみによって合否を判断するという姿勢を今なお崩しておらず、基本的に日本と同じ考え方である。

ところがアジアの多くの国では少数民族枠や農村枠のような特別枠を設けている。その根拠は、受験生の家庭環境や教育環境に著しい差があったというものである。さらに言

えば、もし同じ家庭・経済環境であれば現在よりももっと高い点数が取れたはずであるという予測である。こうした予測は、大学で皆と同じ教育を受けていけば、今後同じように伸びていくのではないかという期待にもつながる。

この点に関連して、学力観の転換とともに、従来の筆記型試験だけではなく、高校の調査書や小論文等を積極的に活用していこうとする動きも出てきている。その典型例は韓国であり、現在では半数以上の受験生は共通試験である「修能試験」を受ける前に調査書や小論文等によって入学が許可されている。台湾でも共通試験の結果を活用しつつ、それ以外の材料で合格者を判定している。こうしたことが可能となるのは、従来の筆記試験による知識偏重を改めたいという政府側の強い熱意であり、知識の量だけが学力ではなく、もっと多面的に判断する必要があるという考え方が登場してきたからである。

ただしここでも問題は、調査書や小論文を評価していく場合の客観性の担保である。いろいろな議論があるとは言え、筆記試験の場合、同じ問題を解答しているという点で1点刻みの点数で評価し順位付けすることが可能である。この筆記試験と比較すると、受験生の（異なる）高校での学業や生活を記録した調査書をどのように評価するのかという点は論争になりやすい。その意味で、それをいち早く取り入れた韓国の実態は注目し値するものになる。

もう一つの問題は、例えば調査書が評価されて入学した学生の場合、入学後の学業成績はしばしば問題になる。日本のAO入試の批判とも通じるものであるが、しばしば学業不振が報告され、したがってやはり筆記試験だけの方が適切ではないかという意見も聞かれる。こうした点は台湾でも出てきているようであり、そのため「学校推薦」や「個人申請」の場合でも共通試験を課すことで基礎学力を担保しようとしている。中国の場合も、その割合は極端に少ないとは言え、6月の大学入学試験以前に（仮）合格者を出す「大学自主募集」という制度が存在する。ただし、それでも学力の確認は必要だということで大学入学試験（原語「高考」）を課し、基準点を上回ることで正式な合格が勝ち取れることになる。こうした動向をみていると、やはり知識の一定量は必要であり、その上でどれだけ多様な学力を持っているかが合否に影響することになる。学力観の拡大が大学入

学者選抜にどのような影響を与えているのかという事例である。

社会の流動化の促進と国内の安定

それでも各国が特別措置を採るのはなぜであろうか。逆に日本や香港はなぜ特別措置を採らずにすむのであろうか。日本の場合、入学試験において配慮が必要なほどの経済的な格差が存在しないということであろうが、香港の場合はそもそも問題になるような農村が存在しないという理由も考えられる。都市と農村の格差が広がると社会不安を引き起こし、国内の安定を脅かされると政府が感じていることが中国の事例からわかる。何も措置を採らない場合、制度を開いてチャンスを与えても、農村の生徒たちが競争に加われないという事態を避けるために特別枠や加点をすることになる。社会の流動化を促すためにも、農村の人材育成のためにも高等教育への機会を与えることが社会的正義だと考えられる。

少数民族に対しても、基本的には農村への優遇政策と同じであり、あらゆる点で格差が必然的に生まれてくる競争社会に少しでも参加させようと制度整備を行っていることがわかる。その際には、「多文化」、「多民族」という基軸で国民を凝集されることを意識し、その団結を強固なものとすることによってグローバル社会を生き抜こうと志向していることもわかる。中国の少数民族政策やタイの山地民族への優遇措置は国内の安定、国境の安定を意識してのことであることもわかるのである。

格差是正措置の意義と課題

その特別措置は、一部重なりがあるが少数民族を対象としたものと、農村を対象としたものの二種類あることがわかる。そして具体的な措置としては、加点措置と定員枠の設定である。こうした措置に課題があることもここで指摘しておきたい。

一つは、こうした特別措置で入学した学生の大学入学後の学業に支障をきたしているとしばしば指摘されていることである。将来への期待によって入学を許可しても現実の講義においてその期待に応えられず、講義についていくことができなくなってしまうケースは少なくないようである。そうしてみるとやはり知識を中心とした基礎学力の重要性が浮かび上がり、こうした学力を担保する仕組みが必要になってくるのである。もう一つは、こうした是正措置に対してどれほど効

果があるのかといった批判に答える検証が必要だということである。公正さが厳しく問われる大学入試であるからこそ、エビデンスに基づいた証拠を伴いながら議論を行う必要がある。

当然のことであるが、格差是正は大学入試制度の改革だけで達成できるものではない。それは教育面に絞っただけでも、入学試験だけではなく、日々の教育実践においても求められるものである。そして「出口」の就職においても是正措置は求められるであろう。本研究では、そうしたさまざまな措置の中の「入り口」にあたる大学入試に焦点を絞ったものであることは留意する必要がある。

(2) 高大接続プログラムの分類

本研究で現在各国でさまざまな名称のさまざまなタイプの高大接続プログラムが導入されていることが明らかになったが、同時にそもそもそれを定義できておらず、その範囲が明確になっていないことも明らかとなった。

その整理のポイントを指摘すると、第一に「大学レベル」の科目を高校生に「先行履修」するもの、という原則を確認することが重要である。ここから大学生が高校の教育課程を復習するような大学初年次のリメディアル教育は含まないことになる。ただしここで注意が必要なのは、高大接続プログラムかどうかはその内容自体から検討することが難しく、大学側の判断に委ねられているという点である。つまり、大学側が「大学レベル」として単位認定すれば高大接続プログラムであり、そうでなければ高大接続プログラムではないということである。これは中等教育修了証の取得を目指すIBDPや大学入学資格となる(旧英領植民地国の)Aレベルが世界中でなぜ高大接続プログラムなのかという点を考える際の理論的な説明となる。

第二にそれは大学の単位として認定されることを前提としたもの(試験結果が良好な場合)、という原則も確認することが重要である。大学の卒業単位として認定されるということは、講義時間と予習・復習時間が一定量必要であり、したがって大学レベルの内容を紹介する1回限りの模擬授業等は含まないことになる。

こうした点を踏まえたうえで高大接続プログラムを分類する場合のポイントは以下の2点となる。第一のポイントは、ある高大接続プログラムが、海外の大学進学を促すものか国内のそれかという点である。これは言

い換えれば、そのプログラムを承認する範囲(=大学)が、海外に及んでいるのか、国内のみなのか、あるいは生徒側から見れば海外の大学に進学が可能となるのか、国内の大学か、という点が最も重要であろう。国際的にみれば、当然前者の方であり、その代表格がAPとIBということになる。ただし注意が必要な点はIBDPのような国際プログラムであっても、国内の大学への進学も可能となる香港のケースがあり、日本の大学でもその数は増加してきていることである。

第二のポイントは、進学先が特定の大学に絞られているか、そうでないかという点である。具体的に言えば、A大学がB高校に大学レベルの講義をして試験結果に基づいて単位認定する場合、受講生はA大学に進学する際には単位を取得できるが、他大学の場合それが承認されないことが多い。高校生にとっては、進学可能性のあるすべての大学に単位認定して欲しいと考えるはずである。これを可能にするには、講義内容を透明化し、その管理も個別大学を越えて教育部のような公的機関が行う必要があるだろう。そうすることで、多くの大学で単位認定に参加することが可能となる。

これら2つのポイントをそれぞれの軸となる図にすると以下ようになる。

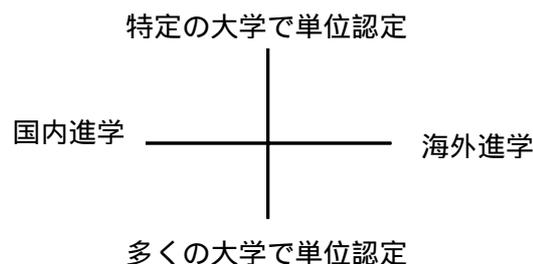


図 高大接続プログラム分類のための試図

この図が示すとおり、進学する大学が国内か海外という軸と、履修後の単位認定が特定の大学のみなのか、多くの大学で認定されるのかという軸で四事象を設定すれば適切に分類できることになる。各国のプログラムを整理する際の一つの基準となろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計20件)
小川佳万「第1章 アジアにおける高大接続プログラム拡大」『アジアにおける

大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、1-14頁。

長濱博文「第2章 日本における高大接続の展望と課題 - アクティブラーニングの導入に着目して - 」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、15-27頁。

小野寺香「第5章 中国における高大接続プログラムの展開」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、58-70頁。

小川佳万・小野寺香「第7章 台湾における高大接続プログラムの展開 国内進学を促すプログラム」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、84-92頁。

牧貴愛「第8章 タイにおける高大接続プログラムの展開 国内接続を中心に」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、93-102頁。

池田充裕「第9章 シンガポールにおける高大接続プログラムの展開 - 南洋理工大学の高大連携・接続プログラムを事例として - 」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、103-120頁。

服部美奈「第10章 インドネシアにおける高大接続プログラムの展開 - 国際共同学校(Satuan Pendidikan Kerjasama: SPK)における国際プログラムに焦点をあてて - 」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2018年、121-134頁。

Yoshikazu Ogawa (2017) Global Impact on College Entrance Examination Reforms in East Asia. *Bulletin of the Graduate School of Education, Hiroshima University. Part III*, Vol.66. pp.1 - 10. (査読無)

小川佳万・姜姫銀「韓国の大学入試における多面的評価 「学生簿中心選考」評価を中心に」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第66号、査読無、2017年、11 - 19頁。

小川佳万「第1章 大学入試制度改革をめぐる論点」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017

年、1-12頁。

小川佳万・小野寺香「第4章 中国高級中学の教育課程にみる多様化策 - 江蘇省の大学入試改革との関連に注目して - 」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017年、43-55頁。

小川佳万「第6章 台湾における大学入試制度の多様化と課題」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017年、67-79頁。

牧貴愛「第7章 タイ大学入試制度における試験科目と選抜方法の多様化」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017年、80-88頁。

池田充裕「第8章 シンガポールにおける中等教育段階修了・選抜試験の多様化と改革動向 改革の概要と問題点について」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017年、89-99頁。

服部美奈「第9章 インドネシアの大学入試における入試科目と選抜方法の多様化」『アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究』、査読無、2017年、100-121頁。

牧貴愛「タイの大学入試制度 「分を知る」社会における公平性」『大学教育論叢(福山大学大学教育センター)』、査読無、2016年、65-79頁。

牧貴愛「タイの大学入試制度 「分を知る」社会における公平性」『大学教育論叢(福山大学大学教育センター)』、査読無、2016年、65-79頁。

小川佳万「台湾のグローバル人材養成策 中等教育段階での試み」『東亜』、査読無、2015年、102-111頁。

小野寺香「中国における中等教育段階のグローバル化」『東亜』、査読無、2015年、102-109頁。

長濱博文「フィリピン教育の歴史的転換 Kto12 教育制度改革の分析」『東亜』、査読無、2015年、104-115頁。

〔学会発表〕(計12件)

Yoshikazu Ogawa "College Entrance Examination Reforms in East Asia" XV. Bulgarian Comparative Education Society Conference (国際学会), 2017.

長濱博文「アセアン共同体における市民性教育の現状と課題」第53回日本比較教育学会年次大会(於:東京大会)ラウ

ンドテーブル、2017年。
Hattori Mina ” Education in Japan ’ s Remote Islands and Remote Areas as New Frontier ” International Seminar: Strengthening of Maritime Culture and Historical Values in the Era of Global Competition (招待講演)(国際学会),2017.

Takayoshi Maki ” Japan ’ s Education...Right? ” Japanese Studies Association of Thailand 11th Annual Conference (招待講演)(国際学会),2017.

池田充裕「シンガポールにおける「競争」と「公平」に関する教育課題について」日本教育制度学会第24回大会、2016年11月12日、中央大学(東京都)

小川佳万「全球化時代の日本大学入學考試改革」国立彰化師範大学論壇(招待講演)2016年10月6日、台湾国立彰化師範大学(台湾)

河井由佳「インドの大学入試における格差是正措置」日本比較教育学会第52回大会、2016年6月24日、大阪大学(大阪府)

牧貴愛「タイ大学入試制度における社会的弱者に対する優遇措置」日本比較教育学会第52回大会、2016年6月24日、大阪大学(大阪府)

池田充裕、大脇康弘、南部初世「シンガポールの中後教育の改革動向」日本教育制度学会第23回大会2015年11月8日、奈良教育大学(奈良県)

小川佳万「日本大学入學考試制度改革與高中・大學的關係(日本の大学入試制度改革と高大接続)」第三屆海峽兩岸世界華人教育領導者論壇(招待講演)(国際学会)2015年11月15日、國立南國際大學(台湾)

Yoshikazu Ogawa “Global Impact on College Entrance Examination Reforms in East Asia”, The 16th International Conference on Education Research, October, 15, 2015, Seoul National University, Korea. (招待講演)

小川佳万・小野寺香「東アジアにおける中等教育段階での留学促進策」日本比較教育学会第51回大会、2015年6月12日、宇都宮大学(兵庫県)

〔図書〕(計4件)

小川佳万・姜姫銀『韓国的高等教育 グローバル化対応と地方大学』、広島大学高等教育研究開発センター、2018年、全104頁。

小川佳万(編)『アジアの大学入試における格差是正措置』、広島大学高等教育研究開発センター、2017年、全95頁。

Rosnani Hashim and Mina Hattori 『Crucial Issues and Reform in Muslim Higher Education』、IIUM Press、2015、246(162-177)

服部美奈『ムスリマを育てる - インドネシアの女子教育』山川出版社、2015年、全106頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

小川 佳万 (OGAWA, Yoshikazu)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 90284223

(2)研究分担者

池田 充裕 (IKEDA, Mitsuhiro)
山梨県立大学・人間福祉学部・教授
研究者番号: 40342026

小野寺 香 (ONODERA, Kaori)
奈良女子大学・アドミッションセンター・准教授
研究者番号: 60708353

長濱 博文 (NAGAHAMA, Hirofumi)
桐蔭横浜大学・法学部・准教授
研究者番号: 00432831

服部 美奈 (HATTORI, Mina)
名古屋大学・教育発達科学研究科・教授
研究者番号: 30298442

牧 貴愛 (MAKI, Takayoshi)
国際協力研究科・准教授
研究者番号: 80610906

河井 由佳 (KAWAI, Yuka)
高知短期大学・保育学科・講師
研究者番号: 20735857

(平成28年度のみ分担者)